

日本語学習支援活動を通じての学生の自発的な学びと成長 —東京外国語大学学生とボランティア・コーディネーターの取り組み—

西原 明子 (東京外国語大学)

1. はじめに

東京外国語大学(以下、東京外大)では2012年4月にボランティア活動スペース(以下、VOLAS)が設置され、学生が地域に出てさまざまなボランティア活動を行っている。このVOLASの前身は2004年10月設立の多文化コミュニティ教育支援室(以下、支援室)で、2005年2月には支援室を通して、東京外大学生が府中国際交流サロンにおいて、外国につながる子どもを対象とした「児童学習支援」活動を開始、現在まで活動を続けている。

外国につながる子どもとは、移民や国際結婚家庭などの、複数言語・文化環境に暮らす子どもたちのことを指す。教室は府中市市民活動支援課が主催し、児童学習支援は東京外大との協働・連携事業に位置づけられており、VOLASが学生募集と学生への支援等を行っている¹⁾。学生はボランティア・コーディネーター(以下、VC)と相談しながら、主体的に教室を運営している。

2. 本発表の背景

日本語学習支援で活動する学生は、2017年1月現在、1年生3名・2年生11名・3年生6名の計20名である。国際社会学部12名・言語文化学部8名、専攻言語は英語とペルシア語が3名ずつ、フランス語・アラビア語・トルコ語・アフリカ地域が2名ずつ。ドイツ語・スペイン語・中国語・インドネシア語・フィリピン語・ヒンディー語が1名ずつで、子どもたちの母語に対応しているわけではない。日本語専攻の学生はおらず、日本語教育のゼミに所属する学生が1名いるだけで、特に日本語教育の素養をもつ学生がいるわけではない。また、ボランティアとしての活動であるため、授業などで自分たちの支援の方法について学ぶ機会は少ない。

そこでVOLASでは①学習支援ガイダンス(活動を希望した時)、②活動終了後の振り返り(毎週)、③座談会(年3, 4回)、④講座・研修(年2, 3回)などの、学生が自発的に学ぶ機会を提供している。特に②や③は、学生相互の学び合う機会と位置づけ、学生どうして課題を解決するようにファシリテーションしてきた。

年度末には学生が1年の活動をふりかえって、「ふりかえりシート」を提出する。本発表では学生たちの「ふりかえりシート」を分析することにより、どのような場面で学生の学びが起きていて、どのような支援が有効なのかを考察したい。

3. 実践

学生は年度末になると、「ふりかえりシート」を記入し、VCに提出している。担当した子どもについてのふりかえり、自分自身についてのふりかえり、自分自身の変化や成長について記入することになっている。ふりかえりの観点は(A)学習支援をやってみたかった理由、(B)やってみてどうだったか、よかったこと、(C)やってみて課題を感じたこと、つらかったこと、どうやって乗り越えたか、(D)学習支援全体に関する感想、となっている。2015年度末に学生が

書いたふりかえりを見ると、学習環境（浜田・林・福永・文野・宮崎（2006）²⁾）として、①一緒に学習支援の活動をしている学生、②座談会やミーティング、研修などの場、③（支援をしている）子ども、についての記載があった。

学習環境 1) 一緒に学習支援の活動をしている学生

担当の子どもの苦手を克服したり、得意を伸ばすために、学生みんながアイデアを出し合って支援していくこの活動はほんとうにやりがいがあるし、楽しいです。

学習環境 2) 座談会やミーティング、研修等の「場」

どうすればいいかわからなかった。座談会でそのことを相談すると、もう少しじっくり時間をかけて子どもが私やサロンに慣れるまで待つべきだというアドバイスをいただき、その後は心に余裕を持って子どもと接することができた。

学習環境 3) (支援をしている) 子ども

（先輩の助言で、）会話のときは、子どもの言っていることをおうむ返しのように聞き直したり繰り返したりして、子どもが自分で整理して言い直せるように導くといいとわかった。これをしながらメモもとると、子どもがメモをのぞきながら「そうそう！」ともう一回言ってくれることが多い。

このように「ふりかえりレポート」からは、学生が周りの学生のアドバイスを生かそうとしている様子を読み取れる。学生から学生への直接のアドバイスよりも、学生が集まって考える「場」でのアドバイスの方が多く、また学生が課題解決していく過程を同じ「場」にいて見るだけでも、他の学生の学びになることもわかった。

4. おわりに

本実践を通して、日本語教員養成課程などに所属していないボランティア学生が支援の方法について考え学ぶために、学生同士で学び合うような「場」を提供できると、より考えが深まることがわかった。今後は、学生どうしだけでなく、教室に関わる市役所職員や、市民ボランティアなど、大学外の人からも学べるようなきっかけづくりができると、今まで以上に学生にとって社会と結びついた活動になると思われる。

注)

1) 詳しくは、西原明子（2015）「大学生による地域の日本語学習支援活動」を支援する 対話と共有を通して『言語教育実践 イマ×ココ』(株)ココ出版、pp.62～73を参照。

2) 浜田・林・福永・文野・宮崎（2006）では、学習環境は、「学習者が会って話をする、じかに見る、あるいは電話やメールでやりとりをするなどの目に見える接触が行われているものを指す」と定義している。

【引用文献】

浜田麻里・林さと子・福永由佳・文野峯子・宮崎妙子（2006）「日本語学習者と学習環境の相互作用をめぐって」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈－学習環境，接触場面，コミュニケーションの多様性－』(株)アルク、pp.67～102